

九州地域地質センターの岡本鉤物標本

1. 岡本要八郎博士との出会い

吉井守正¹⁾

はじめに

地質調査所九州地域地質センターの標本室には、岡本要八郎博士から譲渡された3,000点以上の鉤物標本が保管・展示されている(福岡駐在員事務所, 1963, 1966)。最近、大学生の一行が授業の一部として見学に訪れるなど、地域への地学的知識の普及に貢献している。

たまたま筆者は、1986年から3年間九州地域地質センターに勤務し、これらの標本と係わりをもつことになった。今回は標本の提供者である岡本博士の横顔と、標本が九州地域地質センターに譲渡されたいきさつなどについて述べよう(写真1, 2)。

1. 岡本博士の略歴

岡本要八郎博士は、ひとくちで言えば鉤物収集家。その経歴については桜井(1960)や稲井(1965)が記しているのので、これらを基にあらましをご紹介します。

博士は1876年(明治9年)に愛知県西尾市に生まれた。小学校の代用教員時代に緑柱石や柘榴石などを採集し、これをきっかけに鉤物に興味を持ちはじめた。

1899年台湾に渡り、当時の台湾総督府国語学校の教諭

となる。そして総督府の技手として台湾の鉤物調査に従事した。

1906年台北市近郊の北投温泉で北投石(鉛を含む重晶石の一種、 $(\text{Ba}, \text{Pb}) \text{SO}_4$)を発見。その研究結果を岡本(1909)などに、また1915年(大正4年)には「台湾新産北投石調査報告」として発表した。この新鉤物は、神保小虎によって hokutolite の名前で世界に公表された(JIMBO, 1913)。

1928年(昭和3年)に帰国して一時佐賀県唐津市に住んだ。その後1931年に福岡市へ移住し、1939年九州大学講師となり、理学部と工学部の鉤物実験を担当した。

主な著書には「福岡県鉤物誌」「長崎県鉤物誌」などがある(岡本, 1944, 1958)。これらの功績によって、1958年に九州大学から理学博士の学位を授与された。

1959年には高血圧のために九州大学を退職し、翌1960年3月28日死去した。84歳であった。

2. 鉤物標本を迎えるきっかけ

岡本博士と地質調査所との出会いは1957年のことである。その年、福岡市博多区石城町14-10(中心街天神の北東直距2km)に合同庁舎が落成し、そこへ地質調査所福

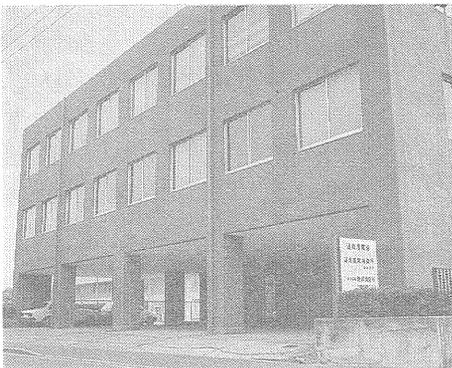


写真1 現在の地質調査所九州地域地質センター3階の窓の左から3個分が標本室。

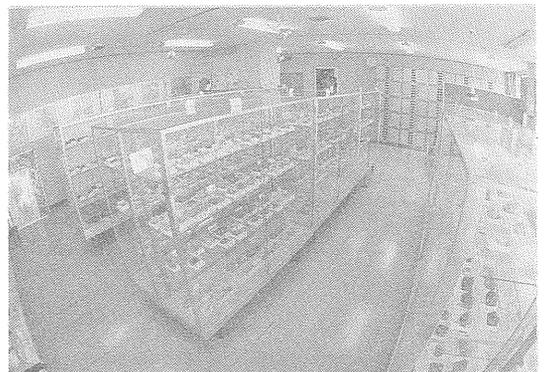


写真2 標本室の内部
最近、標本の保管分が鋼鉄製の引出しに格納された。

1) 地質調査所 鉤物資源部



写真3

新庁舎開所式当日の記念写真

最前列左から、岡本要八郎博士、兼子勝所長、工業技術院の課長、稲井信雄所長、原田種成技官、山下久兵衛事務官、肥塚泰子事務官、工業技術院の寺岡氏(?)、矢加部智和男事務官、廣渡文利技官、藤井紀之技官。(氏名は原田氏による)

岡駐在員事務所が移転した(以下、所名・官職名は、いずれも当時)。

当時は核原料資源の調査が盛んに行われており、福岡駐在員事務所の稲井信雄所長は、岡本博士が集めたウランなど放射性鉱物の標本を、開所式の折に展示することを考えた。標本借り受けの申し入れを博士は快諾して、展示会では自ら説明役も買って出た。

開所式には本所から兼子勝所長も出席した(写真3)。展示された標本に感激した兼子所長は、標本を分けてもらうよう博士に働きかけた。既に高齢となっていた博士は、集めた標本を同事務所に譲渡することにした。

これが岡本鉱物標本誕生の由来である。ちなみに博士は、自著「福岡県鉱物誌」と「長崎県鉱物誌」に掲載された標本を九州大学に、それらに加えて自ら収集した世界各地の標本を地質調査所に、それぞれ譲渡した。

3. 2本の録音テープ

九州地域地質センターには、岡本標本にちなむ2本のオープンリール磁気録音テープが保存されている。

1本目のテープの内容は、岡本標本が福岡駐在員事務所に譲渡された際の、岡本博士と稲井所長との対談である。1959年4月8日に収録され、録音時間は22分である。

もう1本は木下亀城九州大学教授と稲井所長の対談で、岡本博士の人柄などが話題にのぼる。1960年3月19日の収録で長さは31分。ちなみにこれらの録音操作は、のちに九州出張所長となった原田種成技官による。

オープンリール用のテープレコーダは、今どきなかなか見あたらないが、幸い同センターには使用可能なものがあったので、筆者はこれらの録音を聞いてみた。そのテープレコーダはソニー製のTC-102Aという昔なつかしい真空管式である。1960年代のベストセラー機であっ

たが、何しろ旧式で、いつ故障してもおかしくないし、そうなれば、もはや修理不能である。これらの録音を後世に伝えるためには、今のうちにカセットテープにダビングせねばならない。

たまたま新型のダブルカセット式テープレコーダが、閉鎖された東北出張所から管理換えされたので、ダビングの機会意外に早く訪れた。技術的には、TC-102Aのラインアウト端子から音声出力を取り出し、カセットテープレコーダのコンパクトディスク用入力端子に入れてダビングするのが、最善の方法と分かった。筆者は早速、接続用ケーブルを自作して作業に取りかかった。

管理換えされて来たカセットテープレコーダもソニー製である。4半世紀以上も隔たった同じメーカーの新旧2機種が、1本のケーブルで結ばれて協調的に作動する様子は、あたかもおじいさんが孫に昔話を語りかけている趣であった。

筆者は、このダビング作業をしばし楽しみながら、数本のコピーを作った。カセットテープのA面に岡本博士の声を、B面には木下教授の声をそれぞれ入れた。

音を再生してみると、意外にも旧式のテープレコーダから直接聞くより、コピーの方が音質がよく、大成功だった。このカセットテープの1本は、九州地域地質センターの図書室に配架してある。

このような次第で、岡本博士や木下教授と稲井所長との対談が、30年ぶりに陽の目を見ることになった。そして、岡本標本が九州地域地質センターに譲渡される事となったいきさつなども明らかにされた。

4. 録音テープは語る

4.1 岡本博士からのメッセージ

最近筆者は、これら録音テープの内容を聞き書きした



写真4 緊張の面持で録音中の岡本要八郎博士（稲井氏提供）

(吉井, 1990). 語る人の人物像をも写し取ろうと、できるだけ聞いた通りにパーソナルコンピュータに入力し、フロッピディスクに保存した。

今回は岡本博士の録音を中心にご紹介しよう。博士は83歳と高齢で、言葉が聞き取りにくかったり、話の内容が理解し難い所もあった。また、以下の文章は話し言葉と書き言葉との違いから、やや読みにくいものとなっているが、それはこの際やむを得ない。

録音は冒頭で、博士が地質調査所へのメッセージを述べている(写真4)。なお、文中で()は筆者による注、または補足である。

(緊張した口調で)

「鉱物(学)の元祖の和田維四郎先生その他色々の先輩、ちょうど時がよく、鉱物(学)のだんだん発達して来る時代に育ったものですから。

殊に日本の国歌(君が代)は地質時代を表し、砂が集まって砂岩になって、そして下等生物が発生した、という『苔のむすまで』という事まで歌っており、実に地質に関係した立派な国歌をもっておる国は、世界に無いだろうと思います。

そういうような事で、人生と石という事は、十分まだまだ研究されて、そして世のためになるだろうと思いますから、適当に産地の違う所の標本を集めて比較して記憶すれば、いっぺん目で見れば、もうけっして忘れるもんでありません。

標本というものを大事にして、互いにやり取りして、師資相通じて、銘々の興味を増し、かつ知識をふやすように心得るために、まず標本について、その特徴をつかむという事は一番大事なことです。

道を歩いても石さえあれば、石のない所はないのですから、どんな物が発見されるか分かりませんから、新しい報告を注意して、その要点を早くつかんで、そうして石を識別することの練習をするという事は、いろんな発見をする基になると思います。

学問の研究しながら、その資源を求めんといかん、それには、日本は地質が非常に混雑しておいて、研究するには非常によいのです。まず、目をこしらえて、朝鮮なり中国なり行けば、あちらの方は地質の構造が非常に広いから、大いに資源を見つけることができるだろうと思います。

そのためには、標本というものは、こういう風にいちいち見て、その特徴をつかむという事が大事ですから、どうか、あんまり難しいと思わんで、非常にこんな易しい物にないのですから、よく調べて、自分の物にして、そして旅行されると、存外な物を発見するような事があるかも知れんと思います。

どうぞひとつ、この方面の勉強も皆して頂きたいと思います。」

4.2 北投石の発見

録音は、引き続き岡本博士と稲井所長との対談に移る。その中で博士は、北投石を発見した時の様子を次のように語っている(写真6)。

「そしてあのう、北投石を見つけたんです。それが重いつてことは知っていたんですが、

(中略)

見たら、その温泉の沈澱物にマンガンが入るとるんです。それで、これは鉱物の出来方という事を見たら面白からうと思いましたが。そして家へ(持って)帰ってきて、どうも重いんです。ちょっとその沈澱物が。

それから、それを炭酸ソーダで焼いてみたんです。するとプツプツと鉛が出るんですね。つぶせば鉛はよくつぶれるから。

鉛が出る。温泉から鉛が出るというのはおかしいと思った。そしてラジウムのしまいは鉛になるって。火山で爆発湖のすぐそこで、100℃位の温度の所へ沈澱する。結晶するんですからね。

それからそれを研究所に、

『分析してくれ。』

って言ってやったら。

『これは石膏だ。』

石膏にこれだけ比重のある物はないからと思って、それからふいつて、

『私は写真ができんけど、写真で感光しやせんだろうか、やってくれんか。』

って言ったら、そうしたが、10日やってみて、

『感光した。』

って言うんですね。

ああ、そりゃうれしかったが、それを言うわけにいかない。ひと（他人）にね。言うのと知れるといかんからと思って。それから医学校に化学やとる島原という信州の人がおりましたね。それを言ったら、

『いや、おれも何で、鉛が入ったから白金るつぼを壊すことだった。』

と書いていました。」

(中略)

「そしたら東京で芳賀先生か何か分析されて、PbOが21%あるということで。」

(中略)

「(新鉱物の命名について) 私はブンゴナイトって言う名前があるからホクトナイトでよかろうと思うたら、神保先生は、

『ホクトライトがいい。』

と言われたから、それで名前は神保先生のホクトライトになった。

(神保先生は) それを下関へ1貫500匁(5.6kg)送っていて、それを持ってヨーロッパをずーっと回られて、ロシアに行ってフェルナドスキーという人と相談して。そこで hokutolite あるいは hokutoite でいい、どっちでもいいと。

(hokutolite と) 名前を付けられたのが明治何年かな、11月頃の話ですがね、それで新しい鉱物になった。」

4.3 1ドル2円のころ

岡本博士は台湾在住の間に、標本のカタログを見て珍しい物があると、片端からアメリカの業者に注文したらしい。だから収集された標本の中には、めったに手に入らない珍しい物も含まれている。1ドルとか10ドルなどという正札が付いたままの標本が、現在も展示・保管されている。

博士は鉱物収集について、次のように述べている。

「やっぱり実物がないと何にもならんと思ひましてですね。この、色とかなんていうのは、書いた物じゃ、とても想像がつかん。

それで、古い標本にフィラデルフィアの何とかっていう石屋のラベルが貼ってあったから、そこへ手紙を出したら、そしたら今のワーズという大きな方に転送してくれましたね。

それからその頃はドルが2円でしたから、始終5、60円(現在の30万円位?) ずつ金を送りまして。送るとすぐと明るる日、船に乗せて来まして、税関も勘弁してくれましてですね。支那(台湾)に居る時に余分な金を皆こっちの方に使ってしまったので、いま役に立った訳です。」

4.4 標本譲渡のいきさつ

岡本博士の多数の鉱物標本が福岡駐在員事務所へ譲渡されるに至った動機と、そのときの博士の心境などについて、次のような対談が行われている。

岡本：「これだけ材料を集めとくってということが、もしかして、これがどっかへ保存ができんかと思って、自分の家のない時から、これだけは何しとってですね。

なんと、これが稲井さんのお蔭で、とにかくこんないい宿舎に入って綿の布団に寝て、そして私はどこの人間か分からんけども、石の方は皆分かかって、どうも幸せしております。」

(中略)

稲井：「あのう、私の所でお譲りを願った動機と申しますのは、この合同庁舎が出来ました時に展示会を致しまして、その時に先生の今お分け願った標本を含めて、放射能鉱物だけを展示させて頂きました。

その時に本部の兼子所長がこれを見まして、

『これは大変いい物を先生はお持ちである。』

と、それから

『こういった物は、なかなか我々の手では容易に集められない。ひとつ先生からこういった標本をお分け願ったらどうか。』

というような事が動機でございまして、ま、それが実を結びまして、ここにこうした陳列棚を、中味は充実したサンプルを一杯に致しまして、整理できたわけでございます。

色々先生の思い出も深い標本が多いと思うんでございます。少なくとも調査所と致しましても、これを大事に保存致しまして、永く一般の方々に、見たりあるいは勉強して頂くという事を、我々は考えておる次第でございます。」

岡本：「お蔭で60年間の物が、実を結んだような事になりまして、こんな安心はないのです。どうしたらいいかという事は、始終気にはなっておったんですけども、どこに何したら保存ができるか、もう自分では飲んだビール瓶のような物で、持っとっても歳をとって旅行することもできず、利用する道がなかったのが、本当に活用ができて。

ただ遺憾な事は、皆さんから頂いた物も多く、形も小さくて、結晶やそういう物が完全でなくて、まだ立派な物を持っておられる方もありますが、ただ数が多いってだけが、少しはお役に、参考になるんじゃないかと思って、非常に自分としては感謝に耐えん次第です。

誠に所長さんのちょっとした目にとまらなかつたら、こういう安心はできなかったのですが、お蔭で自分の一番の安心ができたという事は、本当に感謝に耐えません

次第であります。有難うございました。」

稲井：「あのう、先生がこうした我々の、地質調査所の企画にご賛同頂きまして、大事な品物を分けて頂きまして、その途中で私の所においで下さいまして、この標本棚をご覧になり、あるいはまた、小さい箱に並べてあるのを大変喜んで下さりまして、『ご自分のお子さんのアパートが出来た』というような事までおっしゃって、非常に喜んで下さったので、私と致しまして、また所員一同と致しまして、大変先生にお喜び願った事を喜んでおりました。

ま、先生の御苦心をここに全部集めてしまったというような風にも考えまして、我々も一緒に喜んでいる次第でございます。」(写真5)。

ちなみに、岡本博士から標本を譲り受けた時の思い出を稲井(1965)は、次のように記している。

「私はその標本整理のため福岡市鳥飼の岡本先生の御自宅を訪問したことがありました。玄関といわず、廊下といわず、ギッシリ積み上げられた諸蓋やみかん箱に、御自分のみ御記憶深い鉱物標本を新聞紙に丹念に整理されて、鉱物名や産地を筆で書き直し、且つ分類して下さいました。私は下積みになった諸蓋を出して差し上げ、お手伝いをいたしました。が、鉱物そのものの整理分類は自らなさらなければ気が済まないようでした。鉱物そのものに御愛着が深かったからでしょう。」

5. 木下教授が語るエピソード

もう1本の録音テープでは、木下亀城教授が岡本博士の思い出を語っている。

木下教授は1925年から1933年まで、商工省地質調査所に勤務しており(日本地学研究会, 1973)、地質調査所の大先輩である。岡本博士とも親交があり、博士から福岡駐



写真5 当時の標本戸棚と稲井信雄所長(稲井氏提供)

1990年9月号

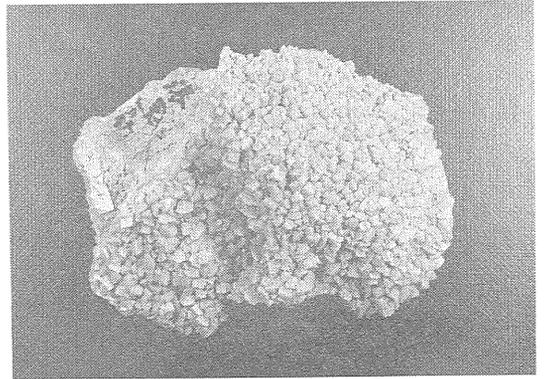


写真6 北投石の標本

横方向の長さ8.5cm, 濱崎聡志技官撮影

在員事務所が受け入れた鉱物標本を鑑定した。このようなわけで、教授もまた岡本標本ゆかりの人物である。

では、談話の中から興味ある部分を数ヶ所選り出して、その要約を記そう。

5.1 秘密の産地

福岡市西部の長垂にペグマタイトがあり、ロシア雲母が産出する。海岸の国道沿いに露出する部分は天然記念物になっていて有名である。

話は1934年頃にさかのぼる。当時、鉱物採集に行ってもロシア雲母は見つからず、産地近くに店を構える吉田という標本屋から買って帰る人も多かった。

ある日のこと、その吉田が岡本博士に金を借りに来た。博士は断って、この件を木下教授に紹介(たらい回し?)した。教授は訪れた吉田には面識がなかったが、当時の金で200円(現在の70万円位?)を貸し、吉田の店にあった売値400円のロシア雲母の大塊を担保に取った。

ところが吉田は結局借金が返せず、ロシア雲母は教授の物となった。教授の仲介によって吉田は地質調査所(本所)にそれを売却して、借金を返済した。

この折に教授は、吉田からロシア雲母の秘密の産地を聞き出して、現地を案内させた。鉱物採集に熱心な木下教授と岡本博士はそれ以来、休日のたびに2、3回、長垂へ足を運んだという。

その後、第2次世界大戦中に軍部の要請で、このロシア雲母を採掘することになった。岡本博士の計らいで吉田が現場主任になり100トンを採掘した。採掘場の上部からは緻密なものが、下部からは六角板状の、いかにも雲母らしい結晶が産出したようだ。

5.2 岡本博士のまろやかさ

博士は鉱物だけでなく岩石の標本も収集した。とくに晩年には丸い形の石を好んで集めた。例えば球状花崗岩、大分県姫島の球状の藍鉄鉱(天然記念物)、砂岩中の

直径10cm位の球状ジュール、あるいは算盤珠と呼ばれる玉籠の一種などである。とにかく「丸ければ皆集める」そうで、「どっか、丸いのはないかね、この頃は角張った物より、少し丸いのが欲しい。」ということであった。

木下教授の言葉を借りると、

「だんだん圭角がとれて、円満におなりになったっちゃうわけでしょうな。」

博士のユーモラスな一面として、甘党の博士は石にちなんだお菓子を収集し、その成果が「鉱物と名辞典」(岡本・木下, 1959)に掲載されている。

木下教授の言によると、

「チャイナマール。これは砂糖を固めた飴玉みたいなもので、なめると黄色くなったり赤くなったりする。

琥珀、これは金玉糖みたい。黄色い色に何んとか、

さざれ石と引くと、さざれ石の当り前の説明もしてあるけれど、これは石で作ったお菓子で、どこの名物。

碁石うちゅうの引くと、碁石うちゅう物は那智黒と、それから日向のハマグリで作ってある。しかし今度は、その3番目か4番目のとこ見ると、それは駿河屋で作っておる飴玉みたいな物である。白い平べったい飴と黒い平べったい飴とが、袋にそれぞれ入れてある、と書いておる。」

念のため筆者が、これらの項目を鉱物と名辞典で引いてみたら、実際の記述は次のようになっていた。

チャイナマール：石菓子、砂糖の色層が同心円的に重なった径1cm内外の円い硬い菓子。

琥珀：(1)amber, 樹脂の石化したもの…… (2)角砂糖形、黄色寒天にざらめをつけた石菓子。京都、その他に「琥珀羊羹」黄寒天粒のある黒羊羹(石炭)撫順、「琥珀飴」黄色の飴等がある。

さざれ石：菓子、神奈川県大磯にて発売、京都にもある。(お菓子以外の記述は見当たらなかった。)

碁石：(1)囲碁用の石、黒は那智黒……(とあり、お菓子の記述は見られなかった。)

木下教授の話は、やや大風呂敷だったが、とにかく鉱物に混じってお菓子が鉱物と名辞典に掲載されているのは事実である。

おわりに

今回ご紹介した2本の録音テープは、録音時間が計53分、約17,300字の分量で、筆者は聞き書きに延べ10時間、その聞き直しによる校正に約7時間を要した。

対談の途中で、話をさえぎるようにジェット戦闘機やプロペラ機が頭上を飛んだり、蒸気機関車の力強いドラ

フト音とともに貨物列車が近くを通過するなど、当時をしるばせる臨場感あふれる録音だった。

テープから岡本博士自身の回顧談が直接聞かれるし、標本が地質調査所に譲渡された直後のホットな録音だったので、当時のいきさつや博士の心境なども知ることができた。その意味でも今回ご紹介した録音内容は、歴史的資料としても貴重と思われる。

博士は、稲井所長との対談収録後1年足らず、木下教授が博士の思い出を語った談話の収録からわずか9日後に他界された。タイミングがもう少しずれていたら、これらの鉱物標本は散逸の運命をたどっていたかも知れない。庁舎新築移転という、ひょんなきっかけではあったけれども、とにかく標本が博士の生前に譲渡されたのは、地質調査所はもとより、博士にとっても標本自体にとっても幸いであった。

私事にわたるが、博士が逝去した年には、筆者は九州大学の学生だった。博士の退官と入れ違いの学部進学だったから授業は直接受けなかった。だが鉱物学専攻の筆者が、約4半世紀後に九州地域地質センターで岡本標本と直接の係わりをもつ事になったのは、また何かの因縁だったようにも思う。

今年が博士の没後30周年にあたる。

文 献

- 福岡駐在員事務所 (1963) : 支所・駐在員事務所を尋ねて(7), 福岡駐在員事務所。地質ニュース, no.105, p.45.
 福岡駐在員事務所 (1966) : 創立20周年を迎えた福岡駐在員事務所。地質ニュース, no.146, p.1-6.
 稲井信雄 (1965) : 岡本要八郎先生の写真に添えて。地学研究, 桜井欣一博士紫綬褒章受賞記念特集号, p.31-32.
 JIMBO, K. (1913) : Am. J. Sci., vol. 35, p.464.
 日本地学研究会 (1973) : 木下亀城先生年譜。地学研究, vol. 24, p.147-161.
 岡本要八郎 (1909) : 台湾産の硫酸鉱物及びフェルグソナイトのラデオアクティブ性(放射能做)に就きて。地質学雑誌, vol. 16, p.72-79.
 岡本要八郎 (1944) : 福岡県鉱物誌。日本鉱物趣味の会, 208p.
 岡本要八郎編 (1958) : 長崎県鉱物誌。岡本要八郎先生御退職記念事業会, 164p.
 岡本要八郎・木下亀城 (1959) : 鉱物と名辞典。風間書房, 874 p.
 桜井欣一 (1960) : 岡本要八郎先生を悼む。自然科学と博物館, vol. 27, nos. 9-10.
 吉井守正 (1990) : 岡本鉱物標本にまつわる岡本要八郎博士と木下亀城教授の談話。地質調査所研究資料集, no.145, 30p.

YOSHII Morimasa (1990) : The Okamoto mineral collection. 1. A profile of Dr. Okamoto.

<受付: 1990年2月22日>